



ピンク色
の
おまじない

比良井 しほり

ピンク色のおまじない

「観覧車に乗ろうよ」

と言い出したのは、彼女の方だった。無邪気に笑う瞳が俺を見つめていて、俺はそのまま後ろへ倒れてしまうんじゃないかと思った。

彼女は高校一年の頃から同じクラスになった女の子だ。一年の頃にグループができて、いつもつるんでいる中の一人だった。高校二年のクラス替えで、俺と彼女は同じクラスになって、他の三人とは離れてしまったが、部活が同じだったり、帰りの方向が同じだったりとなんのかんの二年になっても五人でつるんでいる。

出かける時は五人でいつも一緒だった。彼女を意識しはじめた去年の秋頃から、グループで常に行動することが嬉しいようなもどかしいような、そんな感じだった。

二年になっても彼女とだけクラスが一緒だったということは、おいしい状況だった。二人で話す機会は格段と増えた。そして、ついに、たった二人で出かけるという約束がまとまった。

みんなで二回くらい行ったことのある遊園地で、新設絶叫マシンが出来たというコマーシャルを見た時から、俺の中で彼女を誘うプランが出来上がった。五人の中で、一番絶叫系が好きなのは俺と彼女の二人なのだ。

新設マシンができたコマーシャルを見てから三ヶ月後、話題の新設マシンに乗ろうという話しを作戦通りにまとめて、異例にも二人で遊園地に、今日二人きりで来ている。一週間前からどうせなら告白しちゃおうとか考えて、ぐだぐだと悩んだり作戦を練ったりしてはいたものの、俺は変な緊張と絶叫マシンとで目茶目茶になっていた。

「お前、観覧車なんて乗る奴だっけ？」

つい、いつもの様子で返してしまう天邪鬼な俺がいる。そりゃあだって王道の観覧車だ。二人っきりだ。しかも逃げ場も無い(?)。絶好のチャンスをフイにするのかよなんて突っ込みは、緊張しまくった俺自身に蹴り返されてしまう。

彼女は絶叫マシンに振り回されてくしゃりと乱れたボブカットの髪を撫で付けながら笑った。

「だってさ。私達二人で遊園地来たことって無かったから気づかなかったけど……二人で乗り物選ぶとハードだよな? いや、確かに絶叫系に乗りに来ただけさ」

確かに。いつものグループで遊園地に来ると、一人絶叫が苦手な奴がいるから気を使ってセーブしつつ選ぶ。ここまで絶叫系総攻めってことは今まで無かったかもしれない。

そして、絶叫攻めをしすぎると細かい会話ができないことにも気がついた。並んで乗って、興奮したまままた次に乗って、フラフラになって、何か飲んで、また乗っていた。話したといえば、多少まだ並ぶ時間のある新設マシンのところに居る時くらいだ。俺は何をしに来たんだろう。

「何、限界なわけ？」

絶叫めぐりを一旦止めたいと俺も思っていたのに、ついついのノリで挑発してしまう。俺は本当に馬鹿なんじゃないだろうか。彼女はお腹をさすりながら困ったように笑った。

「気持ちは次の絶叫!　なんだけど、体的に限界。更に続けて二つ三つ乗ったら吐きそう」

女の子だというのに、口をあけて手でもって“吐いちゃう”の意味をアクションしてくれた。ま、俺はこういう彼女が好きなんだけど。

「新設マシンにはしゃぎまくって五回続けたのが効いたかな?　あれ、ぐるぐる回ってたもんな」

「六回だよ、六回」

信じられないよー。調子こきすぎた……と相変わらずの彼女ツぷりに、“やっぱりこいつは単純に俺と絶叫乗りに来たんだな”と少し凹んだ。

まあ、元々そういう事は鈍そうな奴だしなとため息を漏らした。いつものスポーティな印象とはどこか違って、ピンク色のカーディガンを着てきている彼女を見たときは、ひょっとしてとか勝手に期待した自分がバカみたいだ。多分、こいつは何も考えてない。まあ、いいか。そういう想定もしていたわけだし。

「よし、観覧車で休憩だ!」

二人っきりで狭い個室だとワタワタする俺の中の弱虫を無理やり納得させて、俺はあえて元気良く観覧車を指差した。

指先が微かに震えていたことがばれなきゃいいなと思いながら。

遊園地の観覧車は比較的閑散としている。有名な遊園地なら別かもしれないけど、地元な遊園地じゃそれほど観覧車は好かれならしい。並んでいる客もいなくて、すぐ乗れる。さあ乗ろうかと歩き出すと、彼女はぐいと俺の腕を引いた。

ち、ちょっと、あなた。突然さわらないでいただけます？ 緊張するんですけど。なんて馬鹿なことを頭で考えていると、彼女は俺のことなど気にする風も無く、ただゆっくり回る観覧車を見上げて言った。

「ピンクのに乗ろうよ」

え？ 何、そのなんか女の子っぽい感じ。

「は、はあ？ 何言ってるわけ？」

彼女らしからぬ予想外の萌える発言に、俺は焦ってどもりながらも聞き返した。ぴ、ぴんく？ 色指定ですか？

「いいじゃない。ダメ？」

俺の腕を掴んだまま、俺を見上げる。ずるいです。これは、ずるいですよ。

「ピンク好きだっけ？」

彼女が見上げてくる視線を感じながら、俺は彼女を見ることができずに、観覧車を見つめたまま。

「え？ 好きじゃないよ。どちらかという、嫌いな方。むしろ水色が好き」

.....え？ 意味不明なんですけど。じゃあ、なんで今日お好きではないピンクのカーディガンを着ていらっしゃるのですか。

「いいじゃない。ね？ あ、ほらほら。次の次ピンクだ！ ほれ！」

彼女は観覧車を見たまま俺の腕を持って走りだした。

「お、おい.....」

彼女が俺の腕を引いて走っていることが、なんだか、付き合ってるみたいじゃん。とか思って、ピンクだのピンクじゃねーだの、どーだっけいいやという気になる。

観覧車係りのオヤジに彼女が直接「ピンクで！」と念を押して交渉したのもあって、俺たちはピンク色の観覧車に乗ることが出来た。

「ひゃー。空気むさってる」

笑いながら彼女と乗り込んだ観覧車は、春の日差しを浴びて外よりも随分と暑くなっていた。

自然と向かい合う形に座って、一旦は向き合っ目が合ったものの、彼女はすぐに子供の様に外を眺めて“へーへー”“ほーほー”言い出した。

奔放に子供らしく楽しんでいる彼女を見て、かわいいなあと思った矢先、しまった、とも思った。

どうしていいのかわからなかった。告白しようとか、台詞まで考えていたのに、実は何処でどのようという重要な実行部分の計画がぐだぐだで、“そこらへんはなりゆきで”とか思っていた自分が恨めしい。どうしてもっと綿密に計画を練らなかったんだろう。

元に戻そう。いや、本当は、観覧車に俺が誘おうと思っていた。その中で告白しようとか思ったりはしていた。観覧車なら二人きりだし、誰にも聞かれないし。けど、彼女の方から誘ってきちゃったから、もう腹がくくれないまま乗っちゃったし、彼女はいつも通りにしてるし、この状態を自分で打破して愛の告白タイムへと導かねばならない。

今から腹をくくるのか？ 今から？ あー。無理。タイミング的に無理。もう少し後が良かった。でも、観覧車二回は乗れない。

「ここで観覧車乗るの初めてかも」

彼女がやっと気が付いたようにこちらを向いて座りなおした。

「俺も」

笑いあって.....自然と目が合った。

い、いいチャンスジャン！ と思ったは思ったけれども、予想以上に俺の体は固まって胸が高鳴った。こんなに動悸が

激しくなるとは。腹くくる前だったし。あー、そんなこと言ってもらえないわ。くそう。言わなくちゃ。言え、言うんだ、俺。

——古臭い観覧車が風に吹かれて微かに揺れた。

「あの、」

喉に引っかかって出てこない言葉を必死に押し出す。

「俺、お前が、好きなんだ。だから、つき合っただけでいい」

言った直後に、彼女から視線をそらした。怖すぎて彼女を見られない。自分の足元を見てしまう。おろしたばかりのスニーカーに、覚えの無い汚れがあったのを発見して、俺はどこで汚したんだろうとか現実逃避をした。もう無理です。俺の役目は終わった。

むさったような質の悪い空気が俺にまとわりついてくる。換気が悪い。観覧車は換気が悪いな、まったく。足元にいくつかの錆を見つけた。こいつらはどのくらいのスパンでメンテするんだろう。

長い沈黙——俺は観覧車の窓をぶち破ってダイブしてやろうかと思い始めたところで、

「んふふふふふ」

含むような彼女の笑い声が聞こえた。

——わ、笑ってる？

俺がそっと彼女を見ると、彼女は満面の笑みを浮かべて俺にピースサインを出して見せた。

「待ってました！」

は？ な、何言ってる？ ど、どういう意味でしょうか？

——観覧車が微かに揺れながら音をたてて、頂上に来ていた。

「まさか、お前」

少しの時間を要してから俺が立ち上がると、彼女は両手でわざとらしく口を押さえてふふふと笑った。

「いつ言ってくれるのかなー？ って♪」

って、ことは……俺の気持ちを知っていて、俺が告白するのを待っていたってこと？ 今日、二人で遊園地に来たことも、観覧車に二人で乗って言い出したことも……ひょっとして……ひょっとして！？

「それにね、私の今日のラッキーカラー、ピンクなんだ」

は？ 自分で目が点になるのが分かった。

ピンク色のカーディガンに、ピンク色の観覧車。

「ラッキーカラーで意中の人に告白されちゃうかも！ って占いに」

「つか、お前占いなんて信じてたのか？」

意外なことに驚いて言うと、彼女は小首を傾げた。

「いいこと書いてあったら信じるよ。心から」

とても彼女らしい意見だった。意中の人ってところで俺が浮かんでいたのは正直凄く嬉しい。だけど、この告白はなんだかハメラレタっぽくて。

「ラッキーカラーって効くんだね。二つ重なったからかな？ 初めて知ったよ」

しかもラッキーカラーとかで攻められたのがまたなんだか異様に悔しかった。

新設マシンが出来てから、どう誘おうかと思いつけて三ヶ月。やっと話をつけて告白のために悩んだ一週間。俺はなんだかすごく振り回されているような気がするんですけど。俺がふてくされているので、彼女はトボケタふりをして見せた。

「ほらほら。もうすぐ降りる時間だよー」

客を降ろすための係りのオヤジが待ち構えるところ直前で、彼女は今まで見たことの無い照れくさそうな表情で、

「嬉しかったよ」

なんて。その瞬間に俺は全てを許そうと思ってしまった。

ただ、彼女を下ろすときに曲げたオヤジの足元にピンク色の靴下を見つけたときは、なんかすげーやられたーって心から思ったけどね。

End

あとがき

こちらのショートショートは古いパソコンを見たときに
2005年10月のデータ日付で保存されていたものになります。

大きく修正は加えておらず、どうしても読みにくい箇所だけ2014年に、粗くではありますが手直ししたレベルとなっています。

短編となると恋愛が多かったので、
「なんとなく、爽やかな感じの恋愛もの書きたいな」
と思って書いた記憶があります(笑

ちなみに。
作中遊園地や、絶叫マシンが好きなど出てきますが、
著者は絶叫系が大変に苦手です。